

## ビバハウス創設14周年を迎えて

2014年1月1日

青少年自立支援センター ビバハウス

安達 俊子 尚男

### 1) ビバハウスの誕生～それは一人の卒業生の訴えから始まった

今から14年前、2000年9月1日に私たちは青少年自立支援センタービバハウスをスタートした。全国の引きこもりやその他の理由で自立に支援を必要とする若者たちを受け入れる共同生活の場である。俊子58歳、尚男61歳の人生の第二段階の新たなスタートであった。

それは1通の電話から始まった。俊子が創設以来35年間勤務した北星学園余市高等学校を激務による体調不良で退職し、自宅で静養している時だった。「俊子先生助けて、このままだったら、私もおばあちゃんのように餓死してしまう！」勤務していた学校の卒業生、当時26歳のSさんだった。電話だけのやり取りでは全く様子がかめなかった。当時9年間の北星高校教員、20年間の日本共産党余市町議会議員を務め終えた夫、尚男の運転で、隣町小樽市の彼女の自宅へ向かった。母は重度の精神病で、家事は一切せず、彼女が台所仕事をしようとする、「手が汚れる！」と行って、止めさせた。祖母は転倒して骨折し、寝たきりになっていたが、誰も世話を出来るものがなく、餓死同然で数日前に亡くなったという。一家の生計のすべても祖母の夫の遺族年金でまかなってきたので、無収入になったとの事だった。

全ての状況を理解した私達は、自宅への帰りの車中で、彼女を受け入れる決断を即座にした。しかし子供のいない私たちには、彼女を受け入れられる部屋もなく、新しく居場所を作らなければならなかった。自宅から約20分ほどの元農場の一角を借りて、急遽プレハブでの建設を考えているうちに、この話が伝わって、「是非受け入れてほしい」との依頼が引き継いだ。

こうしてわずか数ヶ月で、全ての準備を整え、3人の若者と私たちの24時間の共同生活が始まった。俊子の退職金を全てつぎ込んでプレハブを建てたが、内装費、諸設備費が多額で、オープンをまじかに、資金はほぼ底をついてしまった。状況を案じてくださった、かつての俊子の教え子の親御さんなどからの全国からの支援が次々に届けられた。町内の志ある方々からは、冷蔵庫、炊事用具、化粧台、ベットや布団まであらゆる品々のプレゼントが届けられた。

### 2) バハウスの毎日の生活

ビバハウスを始めて、しばらくの間は、各人の生活習慣の確立が最大、緊急の課題だった。朝普通に起きれるか、ご飯をちゃんと食べれるか、自分の個室の掃除が出来るか、洗濯機を使えるか、洗ったものをきちんと干せるか etc,etc で朝から晩まで追いまくられた。

しかしこのような状況はいつまでも続くものではなかった。少しずつ自分の体を自由に

動かせるようになってきた若者たちは、今度は何か自分にも出来ることがないのかを探し始めた。この若者たちの願いに応じて当初私達は、あらゆる機会に挑戦してみた。しかし、ゆっくりとひとつのことは出来るのに、一度にいろいろな事をこなさなければならない仕事に就いた若者は、続かなかった。また職場の仕事はこなせたのに、職場の仲間から、休憩中に、「どうしてビバハウスに来たの、どんな人たちがそこにいるの?」と尋ねられた若者は、翌日から職場に行けなくなってしまった。

### 3) 農作業を中心にしたグループワークの確立

さまざまな試行錯誤の後に私たちがたどり着いたのは、ビバハウスの指導員のついた農作業のグループワークだった。大自然の中で、ほかの誰にも拘束されなくて、気を許しあった仲間たちとの共同作業は、若者たちに働く喜びを与えてくれた。コミュニケーションの苦手な彼らにも、農作業に伴う必要な会話の中で知らないうちに他人と会話をしている自分を発見できた。これらの一つ一つが彼らの自信につながっていった。後は次のステップを踏んで社会に飛び立つまでだ。

### 4) ビバハウスの現状と課題

スタート当初は、主として北星余市高卒業生などの関係者が大半であったが、数年後にボランティアの方が HP を立ち上げて下さった事もあってか、現在は全国からの応募者で継続的に13室の個室はほぼ満室である。利用者の年齢は13歳の中学生から、元自衛官の47歳まで、二人の大学休学生もいる。約7,8割が男性なのは、「男はつらいよ」の世相の反映なのだろうか?これまで、厚労省よりの委託で、「若者自立塾」などの運営もビバハウスと併行して実施してきたが、現在は公的助成制度は全く利用せずに、どこからもなんらの拘束を受けない完全な自主運営に徹している。創設時に定めた利用料1ヶ月9万円を何とかこれまで守り抜いてきた。諸物価の値上がりで厳しい運営を強いられてはいるが、引きこもりの若者の年齢の高齢化とともに、親の年齢も高齢化し、これ以上の経済的負担には、大半の親は堪えられない現実も一方にある。

### 5) 「年寄り・若者元気村」構想の実現を目指して

これまで、いよいよ迫りくる「超高齢化・少子化社会」を支える一助にもとの思いで、ひとりひとりかけがえのない、無限の可能性を持つ若者の再生を願い、すでに全国からの若者約500人近くが、ビバハウスを巣立っていった。卒業生の中にはいわゆる「限界集落」に移り住んで、地域のお年寄りから頼りにされている者や、余市町内で約10人の老人福祉施設でお年寄りの介護をしているものを初め、全国の施設で数多くの若者が働いている。

今後はより直接的に健康な高齢社会の実現を目指し、ビバハウスから車で約10分ほどの山林1万坪を活用し、年末までに自然木を利用して大型の仮設本部の建設を終了した。高齢者の皆さんの希望に応じられるように、野菜、ハーブ、草花、きのこの栽培、ストレッチ運動、スケッチや囲碁、将棋、書道等のボランティア指導員の申し出もすでに頂いている。お年寄りが自身の長寿を心から喜び合い、伸び伸びと自由に過ごせる空間、若者達がお年寄りを支えながら自らを成長させられる場作りこそ、私たちの新たな夢なのだ。